



畫傳 二編 四

~21
875
14



門へ遠21
875
卷 144

新編水滸画傳卷之拾四

東武 高井蘭山 譯編

明治三十二年
一月十日
講求

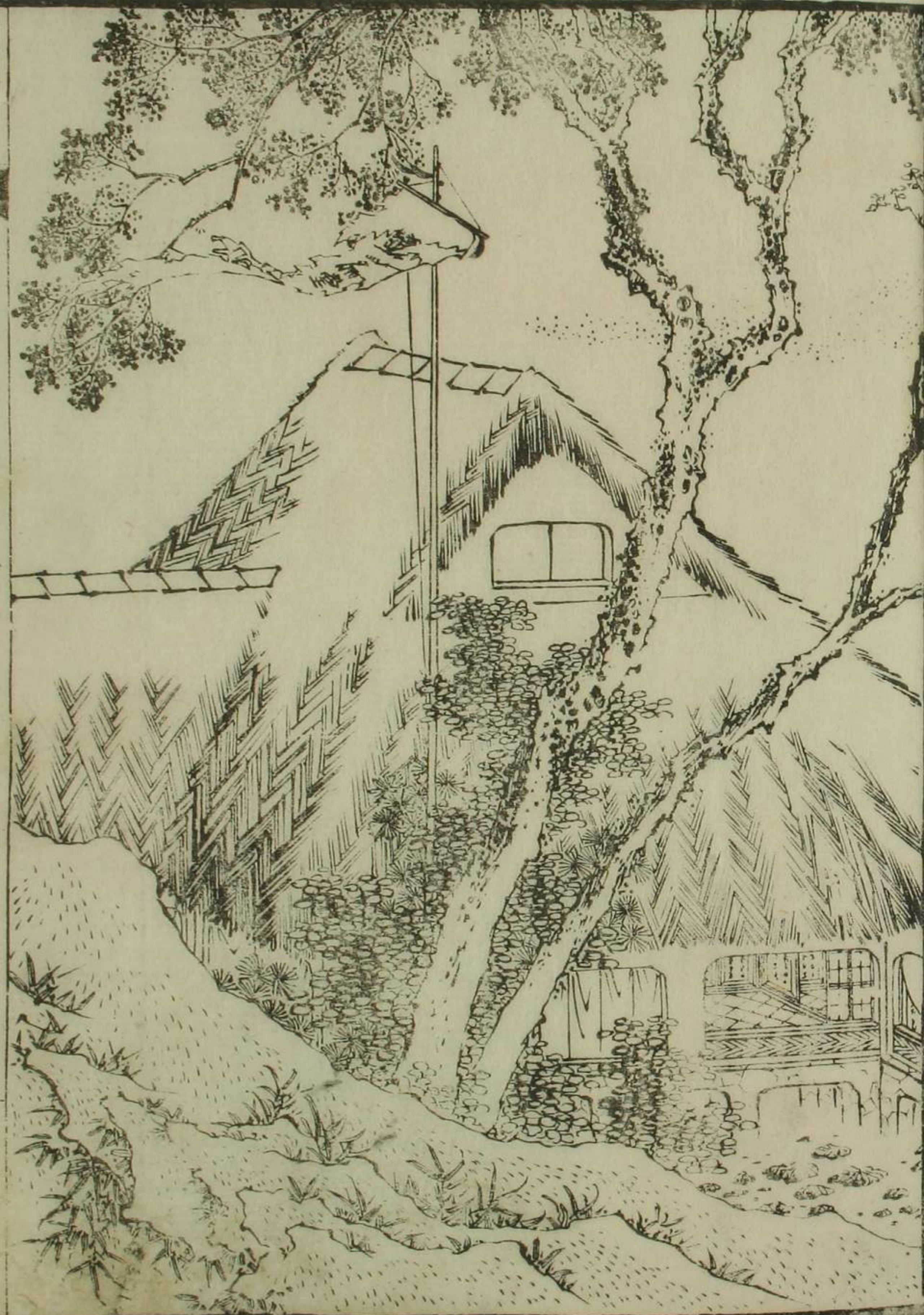
○吳學究三阮と況て撞籌せむ

長用ハ石碇村小
數艘の小舟と枯樹の幸に縦ぎ籠の外へ。一張の破れ網と白沙の上に
晒ぬ乾て手邊山小倚水小傍。約莫十は又間の草房あり。以時兵用通く
と立倚阮二公寓に在やと問乃れ阮小二んと答て多小門外より出来る兵
用渠とるに既る破れ既巾と戴き。身は舊衣被と忘し。足小綻革鞋
と穿。兵用と見て忙し礼と行きて云。今日何の風が先を吹て。以処小
舟しりもや。兵用答て云。小舟を。特く足下と訪ぬ。阮小二何等の事
ある。東隱と云ふや。宜く亟に論し。兵用が云。我向小舟を離れて。

新編水滸畫傳卷之十四

老母存せしと阮小八が家に在るが阮小二が呼ぶをみて乃答ていそく
 又傍へ日者着て約ふも出で唯博奕小の公と聲し大に歩輪て下稍小
 其今朝又我銀の替と借て乞と下稍と色乃ち大吉利市と祈る。博の
 場不出るが未も寓る暇もなかり阮小二呵くと大笑て再び船と漕出に
 下阮小七を呼て云る。我兄の博奕に火昌由あるも勤まれば輪をさる
 速うて本錢拂底に我下と老賭とん頃日の造化悪くして一連に輪つこ
 酒の債も是をもと晦氣く寂寞に逼る之具用ひ云と答て心中不悲ひる
 被等兄弟博奕に歩輪身の艱難の時なれば必定我計は落べきと
 私にこれを脱びたり阮小二阮小七の船と並べて急死るかどにを獨本
 櫓の邊に在りたる船に一人の漢子二串の巻目と持て櫓の下小来り乃
 一艘の小船に跳来て於る筋の索と解れば阮小二を捉て乃具用

小對して云る。今彼小船に乗る漢子は是れ阮小八の具用は阮小八
 とるに阮小八斜に被取中と載し髪を石榴の花と挿し。身は着
 復布と着し胸は赤き豹と刺し。獨る破褲子と纏ひたり。は時具
 用で云る。ハ不造化竟や阮小八を捉て具用と見て急小孔とりて
 云る。ハ呉先生ハ尚我邑と忘れぬして来り。身も別れてより凡三年も
 見えざるに今日何の幸ひして再び會ふ。阮小二云。我今吳先
 生と尋ねて汝が家小訪ひしうも汝が家にあつた事。小八は阮小二に
 以登て三盃と酌ん小八来汝も船と出せ阮小八大に脱び乃掉と操て舟と撐
 三三艘の舟お並て漕出し。れ時と移る水閣の下蓮葉咲乱れ。中へ三
 艘も漕出。於ては人着小上て酒肆小入水閣の上坐と列ねれば阮小二酒
 店の小廝と呼て云る。ハ何等の肉ある小廝が云。猪羊ハ賣尽し。只牛肉あり



吳用
 水閣
 三阮と
 歡飲也



阮小七曰汝速にこれと十斤携ふれ小厮承て牛肉十斤と交替に盛
 て持来り阮小又兵用小對していそぐ先生只能湖水の流さ流を見て
 これと看に砂をへ兵用が云今日系偶来り三公の款待と慕る豈酒を逃
 めざらんや阮小二盃を執て兵用に勧め已に數巡款酬し乃阮小又兵
 用に同て云先生今殺ひぬにありふら必也別に幸わらん阮小二云兵
 生へ今大富人の師と有りて繁昌益昔に強如し今夜来りふは乃ち被
 殺美人の爲に十余尾の鯉魚をさし十斤及斤なる物と急ふこれと求めんが
 事特く我輩を誘ひぬ云阮小七云若前遭のどくまらば十斤尾いそて
 きて百斤十尾忽ちあべりぬもいそ前ハ重さ十斤なる物も変して地ざこ
 阮小又云兵先生遠くは所にておめぬみせめて寺には及斤の鯉魚十
 尾早にお送るし兵用が云系多くの僕の銀と携り價は痛ずまふ大ひ

身と与へぬし阮小七がいそ先生大ひ身鯉魚ハ求ふと能ふまらばに及
 斤の魚も子迷はぬと且鯉魚の事と休て枝く酒と砂とを又盃と
 新ぬ互小お勧めて砂りぬ紅日西に沈んで天長漸晚んと兵用小
 煮ひるハは酒店までハ密事と傳るに宜くぬを宵ハ彼等が舍ふ一宿し
 そ便宜に急して事と商儀せんといまと思ひ了らるに阮小二がいそお
 目も晚ぬとを宵ハ先生と語て我輩に爲す明日は色く鯉魚の油法を
 致すべし兵用が云今日ハ三兄弟の厚情小依て疲と慰めたりを宵ハ系又
 二郎公の宅と借て衆飲と懼し一さんには酒を酌して酒者と獨へ酌せ阮
 小二が云系兄弟何と敢て先生の提撥小なりやまんや系亦自ら酒粗
 肴と獨へ先生に款待すす兵用が云系はは喜ひぬに爲り足下兄弟
 小一酒と勧めぬ何の不可なることからんや足下等これと辭しぬら

即ち所より列れど若くは。阮小七がいも。呉先生再三かくの如らん。バ
豈よく好意に背んや。今宵ハ先生以東及として宜く酒を酌べ。呉
用これとて大に悦んで云七郎ハ系來性最爽なり。と宵ハ愈々小席を
と譲りて乃ち娘子とれ出さく。阮小七小與へ多く酒肴と取りめて。
遂には人酒店と出再び小船に登りて。阮小二が家と居んで漕船り。
暫くの間に。阮小二が家の弟小あり。各岸小上て壺に阮小二が後堂小
入坐既に定りられ。阮小二乃ち不く小煙燭と照し。真心繁華の光
系ハ此時阮小二ハ妻子ありし。阮小七ハ阮小二ハ未だ妻を娶
ざる。阮三兄弟ハ兵用と往て上座小就し。已に酒宴と役け。飲酌
殆り酒数盃巡りし。兵用又鯉魚のとて問ていも。大ひなる泊瀬の裏
小何ぞや。十は又竹の鯉魚あるんや。阮小二がいも。先生ハ未だ知り

あふま。びのどき大魚ハ船て梁山泊の内小あり。我ハ石碣村の内小
大魚せぬと。然れ。阮七が湖の窄き由多。兵用ガ云是より梁山泊ハ
お通じて退く。乃本一派の水なるに。何ゆゑ彼所に往て釣し。なはざる
や。阮小二嘆息して云。先生是と官とるれ。兵用又云。二弟ハ何に縁て嘆
息ハ。や。時に阮小五がいも。先生ハ初りあふま。彼梁山泊ハ本系ハ兄
才ガ衣食の養あてあり。頃日ハ交して往さる。兵用ガ云。僕大ひ
なる泊瀬なるハ官司も又魚とれ。この禁ト難く。ん小何の事ハ。得る。
梁山泊ハ釣せざるや。阮小五ガ云。官司ハこそ。並間野大王も。豈ハ泊
湖と禁する。と。然らんや。兵用ハ云。既に官司より停止禁制ふらん。何
と。はて又梁山泊の衣食と自ら失ひ。るんや。阮小五ガ云。先生系ハ未だ
と知りぬ。るんや。再三猜疑。する。兵用ガ云。我いま。本歴の所。以て知

ざる由多偏に不慮暗さる。阮小七が云は梁山泊の二一席一庄の強盗小
 呂が也。今梁山泊の内ふ新に一夥の強盗来て固く比知と守り。我ど
 こ漁夫の活と云は者も魚と捉て許さる。是用が云来りて梁
 山泊に滅あると云はざりし。ふとや比のど威と振や。阮小二が云。彼強盗亦
 第一の強者者。本落第の儒者。て白衣秀士王倫と号。以第二の改ハ
 攪惹天杜。第三の改ハ雲裏金剛宋万と号。以又以下早地忽律某
 妻と云。共あて大乃の債に滔肆と搦。せし世間のと証竊ひて。備ホ
 に注を以て。十分猛勇ふもあざれも。日者又新に一人の豪傑加
 らぬ。これ列東系の禁軍教頭。そ名ハ豹子頭林冲とや。ん号し
 る。武藝の達人。て。最強勇也。そ外も力量ある多し。然て小賊又
 七百と集り。遠に來往の旅客と相り住。幸りに民舎とお劫。一趕散。

我猖獗と債人。もあざれ。凡一年餘り梁山泊の裡は釣せり。

人と來して他と捉し。や。阮小七が云。尚世の友司ハ。悉く貪欲の族
 して。友軍の別る所。も。百姓と開。犯。金銀財宝と劫。れぬ。又是
 別に一般の賊あり。され。尚世の友人等ハ。大小と備。放て一般
 に強弱と忍れ弱と欺。実に害除くの意あり。害と加のあり。
 奚ぞ能梁山泊小を。林冲と。豪傑と捕。ゆ。友軍亦梁山
 泊小を。膽と裂。魂と消て。逃去ん。阮小二が云。我亦梁山泊小於て
 釣せられ。彼等に尤ら。と。故によく綱と避。道。去。事。世と
 り。是用が云。既に有斯。彼賊等ハ。却て樂と務。と。又大ひる。
 阮小七が云。那們ハ。天とも怕。地とも怯。む。友司とも怖。ず。と。心

泊小上つて彼賊を捉んや。阮小七云。縦ひ彼等捉へりとも。何れの所に献じて。賞と請ん却て天下の豪傑を笑はるべし。呉用云。素か悪意とみて惟るに。是下ホ今漁夫の活業を做人なり。急に梁山泊小入て共に賊首と争ひて一生を安くと嬉まば。凡れ志を成る及ば。阮小二が云先生未だ知らざるあり。我ホ兄弟を幾回この事と商議し。彼賊に加へんと欲ども。彼白衣士王備ハ公拘束し。人を用ふこと能はば向に林冲が始て来りし時。幾手廻回さんとせし。うとも。林冲再三血をそせし。王備已とを討ず。漸にこれとぬ。強れ。王倫今も疑と懐きて心と隔るとなり。彼王備かく妾りに。人と容ざる我も。心懶く梁山泊小宅を絶しぬ。阮小八が云彼王倫ハも儒者にして。学官もあふ。に何故かく心狭小や。若先生のよく。諭違ふあり。

我老早に山小上つて比ハ彼取ふぞ。阮小二が云。素くは先生の。英雄不従を死と弃て報せし。呉用が云。素くは不肖何ぞ。乃に望んや。今山东河小ホの地に英雄豪傑究て多し。阮小二又云。我も若て彼地方ハ英雄あり。とけりれお見るに。中々。呉用が云。郟城縣の東溪村に晁保正と云人あり。と。識るや。阮小八が云。晁保正と云ハ乃ち托塔天王晁蓋と云人。ふてハ。わ。呉用が云。乃ちそ人ハ。阮小七が云。素くは彼人ハ。僅百十里の強と隔る。縁薄さ。ぬ。や。名の之。つて。未だ。對面せ。呉用が云。か。豪傑。何由。お。見。へ。ざ。り。し。や。阮小二が云。素。兄。弟。事。と。な。ん。バ。又。那。地。小。即。に。比。れ。に。い。ま。お。偶。に。呉。用。が。い。ち。く。素。實。に。這。數。筆。年。晁。保。正。が。館。の。近。隣。に。住。居。し。て。孩。子。等。は。讀。書。と。指。範。に。晁。保。正。今。一。套。の。家。を。買。つ。て。と。つ。て。これ。と。待。え。ん。と。思。ふ。これ。小。依。て。素。持。く。と。て。是。下。

ホと高後と遂に家来共々見せ半途小出で奪取見蓋に子とせしう
 せめんと欲はるるは是下ホの心底如何ぞや既小又云一套の富貴
 と云ハわいいうる来歴あるがれ也見保正は是尚世の英雄あり
 是非乃の事とて見保正の爲に害とあるは却て天下の人に笑
 られん此事に於ては是等の命小違くべし兵用がいくは是下は實に
 我と争はず豪傑なるるは以上の孫實情とめて明すべし一套の富貴
 と云ハ定めて是下ホもこれと云ふあり今我は強小於て奪取ひ
 むんと云ハ却て詐之實ハは夜見保正是下ホ三人の大名と噂及び
 特く我と馳名に是下ホと傳て共に高後と云ハ彼一套の富貴力と
 戦せ奪ひ取んと云既小二が云来く三人とも小忍魯ありといは是下默の
 詐あり見保正既に是等の事ありて我を招て高後めんとありは

我々豈敢てこれと稱せんや我亦一命と弁争んば乃這盃酒とめて誓
 とせん小又小七も齊く胸と拍て云我這一命ハ我と職人小執ん具
 用云とては一套の富貴と云ハ尋常の小事にぬは尚朝の大臣蔡太師
 が誕辰ハ六月十八日之ふりて渠が壻小系大名府の梁中書十萬貫の金
 銀珠玉と近日東京に送て別丈人蔡太師と賀せんといは是とて
 一套の富貴と云云今一人の豪傑列座と云若已に見保正が館小來て
 此事と告ぬ故小是下ホと傳て共に高後と云ハ我發なるの豪傑
 と聚めて山の凹の僻靜なるありて這一套の富貴不義の材と劫し
 死て大家これと平に分ち目づく一世の栄と富んと欲はる今日系鯉魚
 と索んと云ハ一系來詐とて化と掩えん為に是下ホは力と戮せ
 られと云べきや既小七身と跳起して云系亦一世の辱と云は度に早

新編小説書傳卷之十四

見蓋夢小
北斗の七星
屋の棟小
落



新編小治政傳卷之十四

十一

新編小治政傳卷之十四

十



ぬべし恰も瘡を不と搔ぐ。知れ先生何れの日も素ホと誘引して甲り
多の兵用が云事ほる。明日又又の一天ホホ立べし。三兄弟大小娘ひ
又蓋と揚て良久しくお勤め。お勤め各歌りり

○公孫衛七星に懸して夜に聚

三阮兄弟兵用より。碎に枝一睡し。夜も已に。又又の時小郎し。六等く
起てお勤とみ。遂に石碣村とホ出。是に信せて。多なる程に。今日東溪
村小娘して。晁保正が。敏小郎り。不に晁蓋ハ。劉唐と。槐樹の下小在
る。兵用已に阮家。の三兄弟と。誘引し。掌と鼓て。大小娘び。乃
これと。延て槐樹の下に。坐り。六人の豪傑。已に一礼。早り。晁蓋先。三兄弟
に。對し。云。望下ホ。三雄の大名と。呼と。今日天良縁と。假す。ひて。遂
小一堂に。手と。握る。何の。存ひ。これ。乃。先。後堂に移りて。一蓋と。をん

再び各と延て。後堂に入。六輩の坐已に。定り。各。兵用。劉晁蓋に。對して。
始。一。にお。違は。晁蓋。大。小。弄。び。不。迷。却。人。小。令。と。て。勇。しく。酒。宴
と。役。け。し。め。於。て。飲。斂。と。催。し。る。三。阮。兄。弟。ホ。晁。蓋。が。人。物。軒。昂。に。して。
云。須。酒。落。る。と。見。て。大。に。心。服。し。晁。蓋。に。向。ひ。柔。く。極。め。て。豪。傑。と。慕。ふ
と。之。も。保。正。と。訪。ふ。に。便。机。なく。虚。く。年月。と。さ。せ。り。今日。り。吳。先。生。の。存。す
と。慕。ふ。ま。ん。が。晁。蓋。と。す。其。款。と。あ。る。と。と。ゆ。べ。さ。や。今日。の。系。金。鐵。に。有
確。小。娘。さ。る。は。時。劉。唐。も。又。聲。り。て。三。兄。弟。小。お。ん。え。互。に。心。と。修。け。隔。意
あり。り。晁。蓋。自。り。蓋。と。執。て。お。勤。め。酒。已。不。開。り。て。日。漸。く。晚。り。れ。又
晁。と。素。て。夜。飲。と。催。し。宋。徒。良。久。り。して。二。又。の。鐘。聲。遂。小。席。上。小
列。れ。各。も。收。り。各。も。退。き。歌。り。聖。日。又。晁。蓋。又。後。堂。の。茶。子。猪。羊。を
供。へ。金。錢。紙。と。焼。て。盟。と。結。び。り。れ。三。兄。弟。ハ。晁。蓋。が。かく。の。ごと。く。志。激。を

見て大小感し。列香花燭を列ひて名盟と祝ていさ。梁中書今如
 系不在ても。民と虐げ財宝を劫奪。今度十方貫の賀儀を東京に納
 つて。丈人蔡老師が誕辰を慶む。是別不義の財をばかに六人の心
 力を合せて。これと奪ひ多んと欲し。六人の内列を起し。若わらば。忽ち大抵
 の殊。神明の罪と慕ふ。さきも。六人の豪傑各藝を演了らば。再び後堂へ入
 て。又酒宴とぞ扱ける。くる所。一人の家僕来て。晁蓋に報して云ら。門前小
 及士の控帳なる先生あり。るが。主人小お入て。茶を求めんと欲し。晁蓋がへま
 汝を以て我ハ今客に相伴して。さけと砂と知りあ。何ぞ這等の事と
 我小報るや。汝は六七升の茶と與て回す。家僕が云。未已に茶と与らん。我
 被却て茶と交は。咄顧主人小見えんとぞ。然ふ晁蓋が云。これ定めて控ある
 と。傳ふての。さきも。宜く二三斗の茶と与て回せ。汝又彼に告らん。保正ハ今

日因密とめて。忙しくさゆ。見えが。從佗日來れと云。家僕命を請て。後
 堂へおるが。少刻もわらざらん。又來て云。茶今三斗の茶と与らん。彼又茶と
 交す。して自ら稱して云ら。我ハ一法。他人之者。茶錢の為に。あは。咄
 保正小見えんとぞ。欲は。さの。と。然くハ見えぬらん。晁蓋が云。汝は。晁蓋
 と。縁せざる由。彼再三かくの。ご。さ。め。汝何ぞ。今日。容有て。忙し。さ。ゆ。さ。ま。ま。
 由。さ。と。時。日。又。来。り。あ。り。ま。さ。え。中。え。ん。と。い。さ。る。や。家。僕。が。云。未。已。に。茶。と。与。らん。か。
 せ。う。も。被。先。生。が。云。ら。ん。我ハ。茶。錢。の。為。ふ。あ。は。ん。實。に。保。正。義。士。と。さ。る。と。を。明。
 て。一。見。と。求。ん。為。の。さ。り。し。や。て。茶。と。以。て。眼。み。け。ひ。ま。は。晁。蓋。が。云。汝。何。ぞ。這。醉。
 の。と。ぞ。解。さ。る。や。これ。從。茶。の。お。さ。と。傳。ふ。て。さ。ん。汝。自。ら。に。三。斗。の。茶。と。与。へ。て
 官。く。中。受。す。べ。い。實。に。容。さ。ら。ん。見。え。ん。と。易。う。さ。ら。れ。汝。が。知。る。事。の。商。後
 して。居。る。に。汝。何。ぞ。再。三。來。て。我。と。妨。る。や。ま。て。い。ひ。う。報。の。と。云。て。交。し。て

我不知するをうれ家僕言と飲して再び門外に於る良久して門外
 大い小開ぐ夢の如く又別に一人の家僕飛び来て晁蓋に報て云く
 彼先生大い怒て我輩十餘人と歩倒し尚吼り廻りて門外を鬧し晁
 蓋を夢て大い誅さ乃ち主人の豪傑に向て云るは是れハ先杖ノ酒を
 斫りて余自己小出まを治め来んとて竟小門前に於りこれと云く一人の
 士身ノ丈八尺斗りも有んと見えて相貌堂々として後表直まは彼
 士怒罵て云るは汝等て人を穢する匹夫我と等米の粟と一列ふるを
 みる晁蓋すむに進んで彼乃士に對して云るは先生今晁蓋不見を欲するハ
 余と亦ん有るん小家人も已小余と与へるハ別小事あるまは余ハ何れ再三
 門前を鬧しむるや彼先生哈哈と大いに笑て云我ハ是河合米錢の如くに
 来び唯十萬貫の爲に保正と訪之這等の匹夫也余と罵るも一時の

怒に糸とて門外を鬧しわの晁蓋が云先生ハ本晁蓋と穢徳のや那先生が
 云只其名を知て吾面を穢せ晁蓋が云晁保正ハ別余が事ハ先生何の事
 わりや彼先生是と夢て忙しく礼とまして云形くハ保正一時の失敬と免し
 又晁蓋いも先生先内へ入て余ををめるとて延て内へ入られ兵用人の
 名に竊に是と避ふり晁蓋已小後堂に於り彼先生を後て密坐に就しめ
 茶終に二三鐘とをりる知に彼先生が云び而ハ脱儀するに宜くは別ふ
 僻靜なる室ありハ付ひ又晁蓋是を夢て彼先生を延て閑る小園の肉を
 炙り賓を坐定りて晁蓋先言て云先生の姓名いん又何れの玉に位あるや
 彼乃士答て余が覆はハ公孫名ハ精乃号ハ一清先生と云乃蕪州の
 産生うて幼き時より好む餘材と習ひ畧武藝を曉し又一家の乃
 術と學びて能風と来し取と喚霧に雲に騰はけられた人皆余と

稱して入雲籠も。素久しく保正の大名と噂しつる。顔と物とに由は。
 仍て早く今日にまわら。今素十萬貫の金銀珠玉と保正小款じて初相
 見の礼と表せんと欲は。保正の是と納めぬら。晁蓋を以てあつた。
 乃答て云るハ先生の室は十萬貫の宝物ハ晁蓋の賀儀ハわ。公孫勝
 大に愕然て云保正ハ何と以て。是と知りぬや。晁蓋ハ素胡亂ハ推察
 してぬ。あつた先生の言に申しぬや。公孫勝ハ素久ハ實に保中書ハ
 東京に送る晁蓋の賀儀ハ是一套の室也。必も失ひぬと云れ。古人の
 強も當に取べきと云下。是て後悔と云れぬと云わ。保正早先素久ハ
 いらぬ。素久今日初て保正と對面し。早速此等の大事を以て傳ゆ。却
 て素久と保正ハ素久ハ似れぬ。これハ是れ也。百姓と利刃て集る。不義の
 財をぬ。多しひれも素久も。何の妨わらん。保正我公と疑ひぬと

ありと後云了んとす。雨に。一巻の人。園子の外より。入。公孫勝ハ私
 の襟と揪て云汝が獲何ぞ。借大ひなるや。明なる。雨ハ。王法あり。暗ハ。私
 神靈も。抜るに豈よく。か。の。と。大罪を犯さんと欲するや。我殊園子の
 外に在て。詳に汝が云とを。公孫勝これと。強て作天。
 忽ち面及去の。て。更に。怒も。出さる。是。何等の人ぞ。次。小。詳。

○楊志令銀擔と押送り

園子の外より。公孫勝小款と。怒る。ハ。何者。され。是。智多星。兵用之。晁蓋
 吟々と笑て。い。公孫先生。晁蓋の。と。先。彼。人と。對面。し。て。云
 人。又。新。に。坐。を。列。ね。ら。ぬ。兵。用。笑。て。云。素。久。一。法。先。生。の。芳。名。を。及
 べ。今。日。幸。ひ。に。此。れ。を。及。て。喜。び。聲。外。不。出。ぬ。晁。蓋。亦。公。孫
 勝。に。向。て。云。る。ハ。這。先。生。ハ。是。其。學。究。と。云。人。之。皆。稱。し。て。知。多。星。と。稱。

名は少しも遠慮のこめざる万必ぞ満言不存あり。公孫猪いも其
 先生の大名に世に知らざる者鮮し。豈科人や天良縁と賜ひ。今日け
 して系云せん。汝小晁保正の豪傑たる由。天下の義士徳と慕こ
 汎来る者多し。是とて保正の平生を知ぬべし。晁蓋云。素下愚なりと。公
 孫猪に先生とのことと英雄小訪らる。今日も己に於我ぞの豪傑来て
 後堂にあり。若に對面さすめり。んと再び公孫猪を延て後堂小移り
 及べ。劉唐の洗即ち出て對面し。大敬悦と催して云。今日ひ系云等
 雨の下まわらば。素小天の引合さる。不はけ。時兵用云。保正の官一
 位の座に就む。見蓋が云。素不。能。不。女。の。貧。乏。して。豈敢て。自。座。を。居
 せんや。六人一月に云。保正一位の座と譲りぬ。誰か。我と犯しや。んや。
 飛く。速に坐して各坐を定めぬ。見に於て晁蓋辞すと。遂に。

第一座小坐して。られ。兵用ハ第二位。公孫猪第三位。劉唐第四位。
 阮小二ハ五位。阮小五ハ六位。阮小七ハ七位。各以。身。を。偏。卜。て。坐。已。に。
 定り。乃。別。大。酒。宴。を。設。け。對。文。怪。び。樂。ん。で。飲。砂。を。傳。り。兵。用。云。
 保正の靈。小。斗。の。七。星。壺。ち。に。屋。脊。に。墜。ると。見。ぬ。ひ。乃。か。今日
 果して我。七人。遂に。我。に。應。る。是。別。後。の。瑞。に。應。る。志。之。彼。十。万
 貫。汝。後。の。災。候。これ。と。棄。ひ。ん。と。必。す。易。う。ん。只。置。く。計。を。な。す。や。
 劉公ハ先。小。路。に。歩。出。て。一。套。の。富。貴。の。過。る。及。筋。を。吹。定。め。ぬ。以。時。公
 孫猪が云。只。此。事。の。ま。ま。公。孫。猪。ハ。休。久。素。詳。に。これ。と。知。り。被。
 等。が。路。ハ。黃。泥。岡。の。大。路。より。來。る。晁。蓋。が。云。黃。泥。岡。の。東。十。里。安
 樂。村。と。云。知。し。一人。の。漢。子。わ。り。名。を。白。日。鼠。白。猪。と。号。し。前。年。彼。を
 艱。難。に。逼。り。嘗。て。我。館。に。來。て。修。費。を。索。し。由。我。厚。く。これ。と。煮。り。

若彼を用る所わづらひ共に是をも拒くや。兵用大に控て云保正の憂も
 七星の弁別の小星もて白光と化して飛去り。劉公孫の身小星する所
 之此復用也。へきとわり。劉公孫云け知より黃泥岡ハ遠く。何まの所を於
 て身と歇んや。兵用云は乃ち白傷を借て身を休歇へ。白傷も亦
 虎伸に加へ斗と授けて。乃ちめん晁蓋が云兵先生。今後の計早竟
 め。乃ち兵用亦笑て云計ハ吾控極小固て。乃ち力と以て死べ。乃ち劉
 公孫と用て死ん。智と以て死べ。乃ち劉公孫と以て死ん。然れども先一ツの
 計あり。知は吾意に合ひ。乃ちめん晁蓋が云如何。計ありや。迷に示
 らへ。計時兵用六人の豪傑小計して。此の如く。此の如くと。低まれば。
 晁蓋これとて。大不悦。天晴神妙奇特の計。二堂なる人皆先生
 と稱して。智多星と云と尤高かり。縦は法葛亮が謀より。とて亦

公孫小賽るま。兵用云を以て計と沙汰し。乃ちめん晁蓋が云。保正の壁上
 小須く耳をべ。窓の外に豈人多らんや。と云。兵用云。我知て必も人
 知られんと。と怖るべ。晁蓋が云。阮家之三英ハ先石碣村に。乃ちめん晁蓋が云。期
 中ハ不速來て。吾合一。晁蓋が云。阮家の三英ハ先石碣村に。乃ちめん晁蓋が云。期
 教授せし。公孫先生劉公二人ハ我敵に。乃ちめん晁蓋が云。期
 べし。六人の者これとて。後りと。乃ちめん晁蓋が云。期
 お勤め。蓋つ小収り。乃ちめん晁蓋が云。期
 初の日。報と文出して。これと阮家の三兄弟。乃ちめん晁蓋が云。期
 將て薄衣と表に。乃ちめん晁蓋が云。期
 及び乃ちめん晁蓋が云。期

するをばは遂に是と納めりて去來回り申すべしとて己小別と若
 ねば晁蓋は人を見送て門外に出るは時又兵用阮家三宰の耳
 に附てはのどく此のどくと低言て委しく申と示しければ三兄弟計
 と夢に遂に石碓村へを駈りたり兵用ハ再び私宅へ返つて心算を指南し
 ければ晁と倫んで毎日晁蓋が敵小返して申すは事を商議しるは茲
 に又小京大名府の梁中書ハ十万貫の礼物已小調りければ近目人々
 撰て赤系に送りせさんと思ひられどもいまだこそ才幹なる者ぞおぼして
 の日後堂小主て只願壽著して居るは小蔡夫人來て初梁中
 書小留て云るは東京に送る被辰の礼物ハ何色の日發見あさくめ
 ちやや梁中書云禮物ハも盡く調りしべ一五日の中ハ發見をまじ
 びべし猶れを於一つのとておいていまだ完くぞければ後晁と壽著は

蔡夫人云何等の事いまだ完くべしと頻に壽著しちやや梁中書ハ
 いづく去年も己に数万貫の金銀珠玉と東京に送りしに押貨
 人聰明るべしして盜賊小礼物と奪られぬ今帳前の人多しと云も
 け押貨人としむる智勇の者なり是小依と躊躇しちやや安せざるあり
 蔡夫人堦の下を指して云るハ相公君に彼若か智勇と吹嘘し
 ちやにけ度の押貨何ぞ梁中書命トぬや梁中書堦の下を指し
 書面獸揚志を日の尚直として堦の下にお宿り梁中書大に悦んで
 即揚志と呼んで廳上にあしめて云るハ我は度今汝と云ふと
 汝辛苦を避す我は小被辰の礼物と押貨して東京に送り申んや猶
 ち我子速汝と卷て大役に就しむべ揚志命と兼て憐れ云るハ
 相公の昔命最違はば猶れを只ちりばせ禮物ハもに駈ちちやや又車に



新編水滸畫傳卷之二十



一清道人晁蓋

門前を開け

新編水滸畫傳卷之二十

しめ。情々に強と急て。盡に東京に馳往。多くハ張ありん。梁中書是
と。咄て大に可して。云乃ハ汝ハ智勇兼全を。豪傑と云べし。我一簡を。彼に
具く。蔡を師へ。我も。今。教。不。速に。立。身。せ。む。べし。揚志。致。そ。し。て。源。く
恩。と。謝。し。即日。十。万。貫。の。礼。物。と。十。楯。小。分。ち。粗。物。擔。ふ。送。り。成。急。ま
廂。禁。軍。と。撰。り。翌。日。梁。中。書。又。揚。志。と。呼。び。て。曰。て。云。乃。ハ。汝。何。れ。の
日。小。發。足。せん。や。答。て。事。完。く。調。り。し。上。の。官。く。明日。亦。立。出。べし。梁。中。書
云。我。丈。人。も。別。に。又。礼。物。有。て。蔡。を。師。に。致。す。又。法。親。於。中。小。書
管。及。び。内。用。亦。も。懸。ふ。多。た。れ。ば。か。丈。人。小。陸。て。我。致。す。あり。し。る。妹。公。姥。也
管。兼。に。虞。候。の。友。友。人。と。汝。小。お。添。て。誓。す。べし。は。客。も。六。皆。丈。人。が。内。事
と。個。ハ。い。れ。ん。揚。志。是。と。咄。て。大。に。以。て。收。す。し。て。云。案。往。と。能。く。は。く。是。へ
ハ。梁。中。書。依。事。調。り。已。に。明日。の。發。足。と。定。て。今。意。に。往。す。死。と。云。ハ

い。ん。ど。也。揚。志。が。云。は。け。た。の。礼。物。渾。て。案。が。身。小。お。添。り。徳。人。も。亦。案。が。心
小。お。添。の。案。が。下。知。と。守。ふ。方。に。く。往。り。し。ん。後。に。今。妹。公。姥。也。管
兼。小。虞。候。等。と。另。添。す。と。案。が。本。屋。小。お。め。り。以。て。被。へ。夫。人。の。用。人。と
云。附。父。蔡。太。師。門。下。の。妹。公。を。れ。ば。乃。及。中。に。於。て。案。に。拘。る。とも。案
豈。能。争。ふ。と。と。云。ん。乃。一。大。事。と。得。つ。と。わ。ら。ば。罪。ハ。却。て。案。一。人。小。故。し。
これ。と。分。説。せん。と。難。く。べし。は。れ。に。案。往。と。能。く。は。く。是。へ。梁。中
書。が。云。は。し。事。何。の。妨。有。べし。我。被。三人。小。命。と。汝。が。下。知。脚。も。背。口。す。し。
揚。志。答。て。既。小。か。く。の。と。く。ハ。即刻。彼。三人。の。名。を。召。て。案。が。親。弟。小。於。て。嚴
小。命。と。云。は。し。時。梁。中。書。乃。ち。三人。と。呼。出。し。命。と。云。は。し。乃。ハ。揚。志。小。十
万。貫。の。金。銀。珠。貨。と。委。ね。案。意。に。蔡。を。師。の。被。服。と。慶。を。最。揚。志。は。け
小。於。て。徳。人。の。採。樂。と。云。し。汝。等。ハ。又。夫人。が。内。用。と。調。り。め。ん。が。乃。揚。志。小

若派等く東京に赴く。乃中一切の事。宜く楊志が下知。小従ふべし。必ず楊志が掛て。大事を得つて。あるれ。乃一點の疎失。わらば。重く罰せらるべし。大小の事。聊し。楊志が下知。小背。是又汝もと罪すべし。三人の者。諱ぐ。命と交。一く。飲。兼して。退。さ。り。り。け。耐。楊志の聲。て。安堵。せ。り。其。日。徳。率。令。く。お。週。翌。日。又。更。の。一。天。小。総。て。十。櫃。の。機。を。廳。前。に。排。列。れ。む。被。之。人。の。若。い。又。夫。人。の。礼。物。と。一。櫃。に。納。め。同。く。是。と。廳。前。に。運。び。來。る。於。合。十。一。櫃。の。機。を。目。録。に。記。し。健。ち。は。宿。禁。軍。と。脚。夫。の。形。を。お。扮。せ。て。これ。を。挑。り。む。楊志が。糒。束。以。て。薄。綿。の。笠。を。戴。き。身。に。六。七。の。紗。の。衣。を。着。し。腰。に。腰。刀。を。帶。し。手。に。朴。刀。を。提。老。幼。皆。曰。く。商人の。執。に。お。扮。し。友人の。虞。候。に。假。に。從。人。の。辭。を。お。扮。各。手。に。朴。刀。を。提。げ。扱。めて。嚴。ま。り。梁。中。書。乃。ち。一。封。の。書。簡。を。傳。へ。て。楊志。小。与。ふ。

楊志。是。と。傳。え。奉。り。已。に。完。く。候。り。乃。遂。小。梁。中。書。に。辭。し。廳。前。を。退。り。老。幼。皆。及。び。友人の。虞。候。と。せ。に。擔。物。を。押。監。し。已。に。小。系。の。城。の。と。お。出。大。路。より。馳。て。東。京。を。原。へ。て。を。發。せ。け。時。又。月。の。中。旬。あ。て。天。氣。晴。明。と。れ。暑。熱。さ。ま。ど。く。人。と。蒸。し。氣。皆。大。小。苦。ま。り。づ。ん。も。毎。日。又。更。の。比。花。と。立。涼。小。系。し。と。路。を。急。ぎ。日。中。に。至。て。暑。熱。さ。ま。時。の。ま。て。暫。く。擔。を。卸。さ。せ。て。憩。し。め。既。小。七。八。日。も。經。り。し。久。し。く。險。阻。の。地。に。お。近。づ。き。村。里。も。あ。り。て。過。か。ら。ぬ。山。路。之。被。土。人。の。廂。禁。軍。初。の。如。ど。ハ。楊志が。下。知。も。及。び。各。各。精神。を。勵。ま。り。務。め。て。急。ぎ。し。る。も。疲。れ。小。系。つ。て。擔。益。重。く。又。時。更。を。熱。堪。え。難。し。大。に。身。心。を。苦。し。め。勅。不。勅。林。の。内。小。入。木。蔭。を。射。ん。て。憩。ん。と。欲。す。楊志。の。是。と。緊。し。く。催。し。て。或。時。ハ。罵。り。の。時。ハ。策。うち。け。又。日。ハ。日。中。あ。も。歇。ま。り。し。久。し。く。氣。皆。心。中。に。恨。を。含。

りて彼友人の虞候も自ら包裏と背ろくがけし時不効り殆儘疲れ
 所彼に站往く体もれば楊志を責て云汝友人共に早急益
 かり申之かく大事と身に干り何ぞ擅に私の自由と貪るや汝
 心わろ者なりば我子代りて彼脚夫ホども僅修まき如に却て後に
 落りぬに後れ偏に我陶氣とたるはこれ何の乃理ぞやけ路は是及人
 多くありて戲而女の如にわづれ汝自ら懶惰なることあらん二人の虞候
 ぐ我事実に懶惰とるは不あはれに云ふ事と熱き由急身倦足軟て
 速に行へ能は是に依て後落りぬ前日の路は汝自ら急し
 路とのそ急さ量の内へ暫く休めしめぬがけ日何故又日中も歇
 ませば一と只顧後を促りや是却て足下こそ急る如と云ん楊志が云
 汝何ぞ套話と云や前日の路は汝自ら急し村屋まで頼んば是日
 の路は

險阻して村屋あり。この刃に我日中にも多き事ありて
 乃とときさば汝は此急事は一と知てき二と知てさるゝ友人の虞
 候ははふた右と云されども心より却て楊志を罵りし方と懐りぬ楊志は
 刀を握策と持撥り引儀て急ぎさるり
 此巻子云傘蓋山通俗名義水滸傳小金蓋山とありて

新編水滸画傳卷之拾二 畢

